新春知事対談（福井放送）

　このページは、令和４年１月３日（月）に福井放送で放送された新春知事対談番組の内容をまとめたものです。

　番組では、津田寛治（つだ・かんじ）さん（俳優）、社長（しゃちょう）さん（ONE PARK FESTIVAL 音楽顧問 ／ SOIL & ”PIMP” SESSIONS アジテーター）を招いて、エンターテインメントの魅力で誰もが楽しめる場所・機会をつくるための取組みについて語り合いました。

**（ふくいエンタメ計画）**

【司会】

　本日は、福井県出身でエンターテインメントの第一線で活躍するお二人をゲストにお招きし、杉本知事とともに、エンタメの魅力でもっとワクワクするふくいをつくりあげていく取組みについてお話を伺います。

【司会】

　まずは知事、福井県をもっと楽しめる場所にするために、県ではどのような取組みを行っていますか。

【知事】

　一昨年、福井県長期ビジョンをつくり、「ふくいをもっとおもしろく」を合言葉にしまして、「ふくいエンタメ計画」というのが中に書かれています。その中の一つが、今日お話が聞けると思いますが、福井を映画の舞台にしていく、それからONE PARK FESTIVALのような音楽フェスのイベントをやっていくとか、観光やまちづくり、こういうところにお金をかけてにぎわいをつくり、たくさんの人を集めていく。また、スポーツでもアスリートナイトゲームズや今度「ふくい桜マラソン」の開催、日本のトップリーグで頑張っているふくい県民応援チームの「FUKUIRAYS」を応援するなど、福井県みんなが盛り上がっていこうと考えて進めています。

**（観光・まちづくり）**

【司会】

　聞いているだけでもワクワクしてきますよね。

　さて、津田さんはこれまでに福井のロケや、福井に関係する役を多く演じてこられましたよね。

【津田】

　そうですね、振り返れば結構ありますね。

【司会】

　福井出身としては、そういった役に臨む際は、やっぱり特別な思いはあるのでしょうか。

【津田】

　やっぱりほかの仕事とは明らかに違いますね。僕らの仕事って、役が憑依して物語のなかにトリップしていくのが仕事なんですけれども、福井弁でやるときはトリップ具合がいつもの10倍くらいになるときもありますね。10年位前に、2時間ドラマで記者の役をやったんですね。それが福井の記者の設定で、市役所の屋上で福井の街を見ながら「不正は許さん」みたいなセリフを言うときがあったんですね。それをブワーっと言い終わったら、プロデューサーと監督が目を丸くして僕の方を見て、「津田さん、今の芝居すごかったですね、どうしたんですか」って言われて。「あぁ、これは福井が僕を見守ってくれて、いいお芝居をさせてくれたんだな」と思ってね。

【司会】

　ありのままの自分を出せるということなんでしょうか。

【津田】

　そうかもしれません。

【司会】

　津田さんがご出演する映画「ハザードランプ」が今年の春全国で公開されますよね。地方都市の代行運転会社で働く男性ドライバーの物語で、ロケはすべて県内の嶺南エリアで行われたそうですね。撮影を終えていかがですか。

【津田】

　やっぱり嬉しかったですよね。嶺南を舞台に物語を紡ぐっていうので、すごく楽しみだったんですけれど、僕はもうちょびっとしか出ていないんですよ。オープニングで代行の客２人のうちの１人なんですけれど、もう１人が福井出身の大和田伸也さん。大和田さんは敦賀、まさに嶺南のご出身で、僕は福井市だから嶺北なんですね。だから大和田さんが本番前に「嶺北と嶺南の闘いにしようよ」みたいに、福井の人しかわからないと思うんですけれど、お互い微妙に違う嶺南と嶺北の福井弁を駆使しながら「嶺北はここがいい」「嶺南はあそこがいい」みたいなのを演じるみたいなシーンになりました。

【司会】

　ネイティブな福井弁が楽しめそうですね。

【津田】

　そうですね、ほかのスタッフや監督はみんな引いていましたね（笑）。福井出身は僕ら二人だけだったから。

【司会】

　公開が楽しみです。知事、県内が舞台となる映画が公開されるって非常に嬉しいことですよね。

【知事】

　嬉しいですよね。監督がいろいろとロケ地を回ってみて、「ここがいい」と選んでいただいたと伺っていますけれど、本当に嶺南は絵になると思いますね。嶺南というのは夏場だったら空や海が青くて、山が緑で、とても風景がイメージしやすい。冬は冬で雲が重いですけれども、海が白くて、ちょっと重い雰囲気のときにはいいと思います。今お話にも出ましたけれど、嶺南は京都弁に近いというかそういう話もあって、人情味も感じられるとても良い場所だなと思いますね。

　いろいろと県も協力させていただきましたし、今のお話を聞いてとても楽しみになりました。私も見に行こうと思います。

【津田】

　ありがとうございます。

【司会】

　社長さんも見たくなったんじゃないですか。

【社長】

　見たいですね。自分は結構早いうちに福井を離れて東京に行ったというのもあるんですが、やっぱり家族はずっとこっちにいるので、一年に一度福井の言葉を聞きに帰るというか。

【津田】

　それはお正月ですか。

【社長】

　お正月だったり、お盆だったり、そのとき次第ではあるんですが、やっぱり良いですよね。

【津田】

　やっぱり故郷なんですね。

【社長】

　故郷ですね。ホームタウンですね。

【津田】

　嬉しいなあ。

【司会】

　やっぱり落ち着きますよね。

【社長】

　そうですね、やっぱり自分が軸になっている場所があると思うのは、すごく力になりますよね。

**（アートや文化によるにぎわいづくり）**

【司会】

　映画の公開が楽しみです。

　続いて伺うのが、音楽などのアートや文化によるにぎわいづくりについてです。去年の１１月、２年ぶりにONE PARK FESTIVALが福井市中央公園にて開かれました。来客者数は２日間でおよそ4,000人。感染対策を万全にしての開催となりました。

　まずは、社長さん、ONE PARK FESTIVALを開催して、今のお気持ち聞かせてください。

【社長】

　そうですね、やはりこのコロナが始まってから、音楽・ライブ業界というのは大きな打撃を受けました。僕もミュージシャンとして、通常であれば国内・海外あわせて、年間50本くらいライブをやるんですが、2020年、2021年に関してはそれぞれ10数本しかできなくて、なかでも有観客、お客さんを入れての開催は数えるほどしかできなかったんですよ。

夏は音楽フェスというのが、音楽好きのためのものだけでなくてご家族連れやファミリー層にもエンタメイベントとして受け入れられてきたなかでのコロナということでした。せっかくこのフェスカルチャーが盛り上がってきたなかで、開催できたフェスがほぼなかった。そうすると正直、商売あがったりということもあるんですが、何よりもそこで起こる文化の爆発みたいなものが、この２年間絶対数がすごく減ってしまっていたというのが何よりも悲しくて。

　その中で、このONE PARK FESTIVALが昨年開催できたというのはすごく、この「すごく」という言葉では単純に置き換えられないくらい、めちゃめちゃ嬉しかったんです。そこに集まってくださった皆さんの様子を見たりとか、しかも普通のライブじゃないわけです。今まで自分たちがやってきたライブじゃなくて、声を出してもらったり、歓声のキャッチボールということが一切ないのに、あれだけお客さんがいい顔をして、楽しんでくれる場所をつくることができたのは、本当によかったなと改めて今思っております。

【司会】

　このご時世ですからと、諦めるのではなく、このご時世だから、こういう形で、という風に新しい形のイベントとして成功例になりましたよね。

【社長】

　そうだといいんですけれどね（笑）。

【司会】

　知事もONE PARK FESTIVALに参加されたと伺いましたけれども、いかがでしたか。

【知事】

　はい、行きました。私は2019年の１回目の時も行きましたけれど、今回は今回で今言われたとおり、みんなきちっとソーシャルディスタンスやマスクはもちろんして、大声も出さないことを守っていただきながら、みんなでつくっているという雰囲気がものすごく出ていましたね。ここを守らなくちゃ、本当の意味で盛り上げなくちゃ、というものが出ていましたね。

　おっしゃっていましたが、何より家族連れの方が多くて、お子さんが小さいながら、ゆるく音楽を聞いていたりとか、寝そべっていたりとか、今回人数が少なかったのが逆に良かった部分もあって。それで本当に聞きたいときには前のほうに行って、そうでないときは日陰のところにいたりとかやっていましたが、そういうのもよかったですし、なおかつ途中ちょっと時間があると外へ出て食事してもらったりとかこういうこともしている。出たり入ったり、こういうことをしているわけです。まちなかも潤います。これからも絶対に続けていけるように応援したいと思っています。

【社長】

　ありがとうございます。

【司会】

　つまりは、成功したということですよね。社長さん。

【社長】

　はい、言い切っていいと思います。お墨付きをいただいたと言っていいんじゃないでしょうか。

【司会】

　そのONE PARK FESTIVALですけれども、今知事もおっしゃっていただいたように、福井の街の中心で開催される初の野外音楽フェスですよね、どうして福井で、そしてなぜ中央公園という場所を選んだのでしょうか。

【社長】

　そうです、これには諸説あるんですが・・・。諸説あるっていうのもおかしい話ですよね（笑）。

【３人】

　（笑）

【社長】

　我々SOIL & “PIMP” SESSIONSと若手のバンド、そしてDJという屋内のイベントをずっと続けていたんですが、それをフェスにしようという一つの動きがあったことと、それと同時期に、地元でずっと活動している、それこそ数十年地元でずっとイベントをやっているDJたちが、福井市中央公園がきれいに整備されたときに、「ここでフェスができたらいいよね」というような話が起こっていて、それが同時期にありまして。それが、じゃあやるか、というふうにスタートしていった感じですね。

【司会】

　2019年に第１回のONE PARK FESTIVALが開催されて、2020年には第２回の開催が予定されていましたけれど、新型コロナウイルスの影響で残念ながら開催延期となりました。そして去年、ONE PARK FESTIVAL 2021が感染対策を徹底したうえで開催されましたよね。社長さん、どのような感染対策に取り組んだのでしょうか。

【社長】

　まず、一番大きいところは、先ほど知事もおっしゃっていただきましたが、声を出さない。これが一番大きなところだと思います。ライブというのは叫んでなんぼ、というところもあると思うんですけれども、まずそれを我慢していただく。同時にライブエリアに関してはロープで２ｍ間隔くらいで距離が取れるような目印を設置して、それでソーシャルディスタンスの確保に努めていただくと。これはまさに来場したお客さんがつくったフェスと言って過言でないくらいご協力いただきまして、それが今回の成功につながったのではないかなと。一番大きな要素はそれですね。

　加えて、入場時のPCR検査確認、もしくは抗原検査をゲートで受けていただく。そして本来であればONE PARK FESTIVALの一つの大きな売りであった食をすべて諦めました。場内の飲食を、水分と最低限のミネラル分の補給のみの出店としまして、そのほかは周りに美味しい店がたくさんあるので、街をONE PARK FESTIVALの飲食エリアとして、街に出てご飯を食べていただくという仕立てにしたことで、今年開催できたということが大きいんではないでしょうか。

【司会】

　津田さん、今の状況を聞いていかがでしょうか。

【津田】

　めちゃくちゃ素晴らしいなと思いましたね。こういうやり方があるんだって。僕も舞台とかそういうことにかかわっているんで、やっぱり大打撃を受けているんですよね。舞台も、映画館もそうですけど、大変でしたね。なんでこんなにいじめるんだ、みたいに自虐的に思っちゃうんですよね。でも社長さんはそう思わずに、「だったらできることをやろう」ということでやってみたら、お客さんが参加してくれている。先ほど知事もおっしゃった観客参加型というのを絵に描いたようにできたと。しかもフードコーナーも作れない分、駅前に出ていただいて、駅前の活性化にもつながるという。そういうネガティブなことも全部ポジティブにひっくりかえっている。これこそまさに人の力だなという気がしますね。人の力で成功したフェスなんだなと今お話を聞いていて思いました。

【司会】

　より県民が一体となった感じがしますね。

【社長】

　そうですね。ちょっと個人的に興味があるんですけれど、舞台とか演劇は配信ではやられていたんですか。

【津田】

　配信でもやりました。でもやっぱり配信は……。

【社長】

　違いますよね。

【津田】

　そうなんです。録画と配信とどう違うんだみたいな。

【社長】

　誰もいない空間に向かって表現するっていうのが……。

【津田】

　エネルギーの使い方がまた違いますよね。

【社長】

　そういう場を設けていただくだけでもありがたいんですけれども、どこに向けてやっていいのかというのがわからないんですよ。

【津田】

　そうなんですよね。お客さんとのキャッチボールなんですよね。それができないという。さっきも社長さんのお話伺っていて思ったのが、お客さんが声援を送れなかったとしたら、その声援の代わりに何かをするんですか。

【社長】

　やっぱり拍手だったりとか、僕が推奨しているのがスマートフォンのライトを点滅させる。ステージ上からみるとすごくきれいなんですよね。ピカピカチカチカして。

【津田】

　なるほど、キラキラとして。

【社長】

　こういうことで、こっちに何か送っていただくということもあるんだけれど、でもいてくれるだけでいいんですよね。マスクしているから目元しか見えないけれど、めちゃめちゃ笑顔なのわかるじゃないですか。本当にあの様子がじかに見えるだけで、全然違う。

【津田】

　踊りはオッケーなんですよね。

【社長】

　踊りはオッケーです。全然オッケー。

【知事】

　まさにそうでしたね。普通は拍手ですけれど、こういうふうに（踊りながら）だんだんなってきたりとか、みんなこうやって踊っているんですよね。そこで気持ちが出ているんですよね。多分前から見ていらっしゃってもすごく伝わっていると思う。

【社長】

　伝わるんですよ。

【知事】

　乗れば乗るほど動作が大きくなっていく。声は出ませんけれど。

【社長】

　声は出ないですね。

【津田】

　でも声が出ない分、想像力が掻き立てられますね。素晴らしいな。

【社長】

　これはこれで発展していく文化かもしれないですね。

【津田】

　ひょっとしたらそうかもしれないですね。

【司会】

　また一つの方法かもしれないですね。

【知事】

　じゃあ今年こそ津田さんにもお越しいただかないといけないですね。盛り上がりますよ、本当に。

【津田】

　話を聞いていると本当に行きたいです。

【知事】

　本当にゆるい感じなんです。なんというのかな、あの張りつめているというよりも、好きな曲を聞きに行って、そうじゃないときには寝そべって横で聞いているようなそんな感じなんです。

【津田】

　中央公園というあの場所の特性もあるのかもしれないですね。芝生が広く取ってあるから寝転んだりもできるし。行ってみたいですね。ラインナップみたらZAZEN BOYSとか出ていて。僕ZAZEN BOYS大好きなんです。向井秀徳さん大好きなんです。

【社長】

　じゃあ向井さんに連絡しておきますから（笑）。

【司会】

　今年の開催も楽しみにしています。さらにONE PARK FESTIVALは国の「ワクチン・検査パッケージ制度」の技術実証としての側面もありました。

　知事、この「ワクチン・検査パッケージ制度」について教えていただけますか。

【知事】

　はい、ワクチン・検査パッケージは、コロナが感染拡大してきたときでも、できるだけイベントや飲食とかを抑えなくてよいように、例えばワクチンの接種済み証ですとか、あとは、今お話にもありましたけれど、PCR検査をこの二日以内に受けましたよ、とかそれから現場で抗原検査を受ける。こういうことで今は感染していないよ、とお互いに確認し合う。こういう形でやるわけですね。結構大変かなと思いましたけれども、ONE PARK FESTIVALの現場でアンケートを取って確認させていただいたら、「安心・安全でとても楽しめた」という人がまず99％。ほとんどの皆さんがそういうふうに言っていただきましたし、手間がかかるというのも反対で、簡単でしたというのが75％ということで、これからもコロナ禍のなかでイベントなどやるときにはとても大切だなと思います。また、大切なことは、どうしても健康上のことでワクチンを打てない方もいらっしゃいますので、こういうときには無償で検査が受けられるような体制を県で整えていきたいと思っています。

【司会】

　不安なままだと思いっきり楽しむことができないので、こういった安心できる制度があるといいですよね。

　さて、ONE PARK FESTIVALの翌週には、福井市の一乗谷朝倉氏遺跡にて関連イベント「ONE PARK REMAINS in ASAKURASHI ISEKI」も開催しました。社長さん、ONE PARK REMAINSについて教えてください。

【社長】

　そうですね、この時期によく２本もフェスやったなというのが正直な感想ではあるんですが（笑）。

　実は一昨年、ONE PARK FESTIVAL本体は開催できなかった代わりに、ONE PARK Restaurantというイベントを中央公園で開催しまして、それを昨年は一乗谷朝倉氏遺跡に場所を移して、食と音楽とサウナとキャンプ、この４本立てでやってみようということで。

【津田】

　サウナも入っているんですね。

【社長】

　サウナ入っているんですよ。すごくきれいで歴史のある一乗谷朝倉氏遺跡で、当時の武将というか、武士の皆さんが入るお風呂といえば蒸し風呂だったという。そういうところから着想を得まして、YAEI CAMPという野営を模したキャンプとサウナで楽しんでいただく。プラス食と音楽という形でやらせていただきました。いい場所ですね、本当にあそこは。

【司会】

　やっぱりイベントというのは一回きりではなくて、関連イベントがあるとさらに盛り上がりを見せてくれますよね。知事、一乗谷朝倉氏遺跡といえば、県でも魅力発信に向けて様々な取組みを行っているんですよね。

【知事】

　そうですね、２年２か月後になりますかね、新幹線が福井・敦賀まで来るということで、お客様に向けて今一乗谷朝倉氏遺跡をどんどん盛り上げようということで整備もさせていただいています。例えば笑点の司会の春風亭昇太師匠、この方はお城も詳しくて、一乗谷の朝倉氏遺跡が日本最強の城と言って選んでいただいて。この方に一乗谷朝倉氏遺跡の名誉お屋形様になっていただくとか、こういうことも昨年はさせていただいて、今ずっと継続してお願いもしていますし、あとは朝倉氏遺跡の博物館を今年１０月にオープンするんですけれども、これがまたすごくてですね。当時の遺構があって、足羽川のところを舟運で船があがってくると船をつける入り江があるんですけれど、この入り江が出てきたんですね。つくる直前に発掘していたら。それをそのまま埋めないで、それで上から見られるという。本当に珍しいですし、当時の朝倉館を原寸大で再現もしているので、またドラマなんかでも使っていただけると思います。本物の、当時の館を再現しますので、また何かで使っていただければと思います。

【司会】

　福井が誇る遺跡ですからね。良さは残しつつ、少しずつ発展していく姿というのはワクワクさせてくれますよね。

【知事】

　そうですね。

**（次の世代に向けた取組み）**

【司会】

　さて、これから福井をもっともっとワクワクさせていくためには、次の世代を育てていくことが大切だと思います。津田さんは県内で開催される映画祭で、審査委員長を務めていらっしゃいますよね。詳しく教えてください。

【津田】

　そうですね、もう７年くらいになるのかな。第６回を去年の１１月あたりに開催しましたけれども、福井駅前短編映画祭という、福井駅前という冠のついた短編映画祭なんです。元々は福井の駅前をもっと活性化させようということで始まった映画祭なんですが、当初はドーナツ化現象なんかもあって、福井駅前に元気がないなということがあったので、それを活性化させる意味でもつくった映画祭なんです。要は街を題材にした映画を全国から集めたいという思いがあったんですよね。福井駅前はどこにでもあるような地方都市かもしれないですけれど、福井に生まれ育った人間にとってはものすごく大事な場所だったりするんですよね。僕なんか特にそうで、ものすごくたくさん思い出の詰まった街だし、そういった街ってひょっとしたら全国にたくさんあるんだろうなと思って。みんなそこで生まれ育った街を主題にして、短い映画を撮って、送ってきてくれたら嬉しいなという思いもありまして、開催した映画祭なんですね。それをやることによって、その中に素敵な作品を選んで、撮った監督にも来ていただくと。そうすると福井に住んでいる方々もその映画祭に参加することで「ああ、他の県にもこんなに素敵な街があるんだ」とか、いろんな県を福井の駅前にいながら旅するみたいな気持ちになれたりとか。他県からいらしていただいた監督には「福井の駅前すごくいいところだな、次回作は福井の駅前で撮ってみようかな」みたいに思っていただいたら、発信もできるし、取り込みもできる。こういうことがもっと活発化するといいなと思ってやっています。

【司会】

　そうですよね。また、県内で参加者を集めて、数日間で映画を撮る取組みがあると。

【津田】

　はい、ムービーハッカソンという企画です。これも福井駅前短編映画祭の特徴なんですけれども、このムービーハッカソンが映画祭に内包されているんですね。そこで撮った映画を、福井駅前短編映画祭でかけるんですけれども、このムービーハッカソンという企画自体が福井市民を集めて、福井駅前を舞台に、いくつかの短編を３日という制約のなかで撮るという試みなんですね。

【司会】

　なかなかですね。

【津田】

　そうなんですよ。映画づくりを体験したい人に朝集まってもらうんですね。集まってもらって、そこで撮影をしたい人、といって手を挙げた人に撮影部になってもらって、録音をしたい人、出演をしたい人、と言っていって、その場で手を挙げた人を集めて、じゃあこのメンバーで撮ろう、といって、その場でパパっと台本を考えて、福井駅前で撮っちゃう。

【社長】

　その場で撮影するんですか。

【津田】

　そうなんです。それを３日かけてやるんですけれど。

【社長】

　めちゃめちゃ面白いですね。

【津田】

　そうなんです。それを３グループで同時にやるんですね。だから作品が３つぐらいできあがるんですよ。それを福井駅前短編映画祭でかけて、こんなのができましたよ、のように。その中でつくった１本が他の映画祭で賞を頂いたんですよね。そうすると賞を取るものが出てきたりすると他県への福井のアピールにもなりますもんね。そういうことにも偶然つながっていったと思っています。こちらの方もさらに活性化させて、福井駅前短編映画祭で賞をもらっていただいた監督に今度はムービーハッカソンの監督をやってもらって、福井駅前を舞台に撮ってもらう、福井市民にと一緒にね。そういうのもこれからやっていきたいと思っています。

【司会】

　どんどん県外に発信できそうですね。

【津田】

　そうですね、県内・県外がどんどん融合していってくれたらいいなと思いますね。

【司会】

　楽しみですね。

　また、県ふるさと文学館で開催した「文学フェスタ2021」では朗読会に参加されたそうで多くの世代の方が訪れたと伺いました。いかがでしたか。

【津田】

　『天狗争乱』という幕末の尊王攘夷の志士たちが都に行って自分たちの思いを伝えようとして、都のほうに上洛していったんですけれども、その途中で悔しくも斬首されてしまう。その斬首された土地が奇しくも敦賀だったんですよ。天狗党とそういう縁があるんですけれども、『天狗争乱』を朗読させていただきました。おじいちゃん、おばあちゃんが多いのかと思いきや、結構若い人もたくさんいらしていただいて、すごく楽しかったんです。

　一番楽しかったのは、マリンバという木琴の大きいものみたいな楽器があって、それをふくだなるみさんという福井在住のマリンバ奏者の方が、若くてかわいらしいお嬢さんなんですけれどもその人とセッションしながら朗読できたというのが、僕の初めての試みだったんですよ。

【社長】

　それすごく面白そうですね。

【津田】

　音楽と朗読の融合みたいなね。僕本当に音楽音痴で、演奏とかやったことなかったんですけれど、朗読という形で楽器と初めてセッション出来たんですよ、生まれて初めて。ジャズの楽しさってこういうことなんだと。

【社長】

　そういうことですね、まさにそういうことです。

【津田】

　この音楽に乗せられて声が大きくなったり、なるみさんの方も僕の声に合わせて静かにしたり盛り上げたりとか。自分の力がさらに予想外にレベルアップするみたいな。こういうことだったら何回もやりたいなと。

【社長】

　素晴らしいですね。まさにセッションですね。

【津田】

　やりたいですね、セッション。

【社長】

　やりましょう。すごく面白いと思います本当に。

【津田】

　今度のフェスティバルでやってみたいですね。ONE PARK FESTIVALでね。

【社長】

　ぜひやりましょう。これを機に。

【司会】

　楽しみにしています。このように県民が芸術・文化をはじめとするエンターテインメントに触れる機会をつくることは本当に大切なことだと思います。知事、県ではどのような取り組みを進めていきますか。

【知事】

　今のお話も本当に面白かったですね。音楽とのセッションもありましたし、朗読のお話をそこで一緒にやるというのはなかなか考えられませんし、映画もいろいろと福井を取り上げていただいたり、またONE PARK FESTIVALのように盛り上がるイベントというのも大事だと思います。

　もう一つあるのは、県民の皆さんに参加していただく、自分も奏でてみるのも大事かなと思っております。一つには、近いところで、例えばまちなかとかまちかど、こういうところでミニコンサートを開くとか、また自分も楽器を鳴らすということでヤマハミュージックジャパンと一緒に「おとまち＠福井」という企画もやらせていただいて、みんなが自分で楽器を弾けるようにして、それを発表していくということをやったりしています。また、文化ホールは結構使われていなかったりすることもありますので、ここをみんなのホールにしてしまおうと「みんなのホールプロジェクト」というものもやらせていただいて、そこでプロの音楽家にこのときは音楽を聞かせてもらうとか、いろんな形で、自分も聞く側で、もしくは奏でる側で参加できるような身近な文化に触れる、もしくは自分が文化をやる。そういったことができるようにしています。

　また、もう一つあるのが、福井の駅前がこれから変わっていきますけれども、このなかで今経済界からいろんな発案をもらっています。このなかに、例えば音楽のイベントをやったりとか、スポーツイベントをやったりするようなアリーナをつくったらどうかというお話もあります。もちろん中身をどんどん詰めていってやる価値があれば、場所をつくっていくというのも大事かなと。そうすると、中には、１万ｋｍ先から人を集めるんだという経済界の方もいらっしゃいますし、そういうことも応援して、もしもアリーナもできれば、これをみんなに使ってもらって、たくさんの人がいろんなところから来る、こういうようなにぎわいの福井県にできたらいいなということを今県と福井市と、それから経済界と一緒になって検討していこうとしています。

【司会】

　街がにぎやかになるのが想像できますね。

【知事】

　そうですね。

**（福井の持つ可能性）**

【司会】

　これから県外から多くの人を呼び込んでいくため、福井県はどんな可能性を持っていると思いますか。津田さん。

【津田】

　まずはやっぱり福井のすごくいいところは「人」なんですよね。街づくりというのを、映画祭を通じたりしながらいろいろ考えてきたんですけれど、街ってやっぱりふと思い浮かべると、建物とか公園とかが浮かんできがちなんですけれども、本当に街をつくっているのは人なんだなと。どういう人がそこに住んで、どういう表情をして、どういう仕事をしているかということによって、同じ建物が建っていても、その建物が違って見えたりとか、公園の色合いが全然違って見えたりする。やっぱり建物、公園なんていうのは整備されればされるほど、住みやすさを追求するとどこの地方都市も似たような形になってしまうんですけれども、でもそこに住んでいる人の色が違うと同じ建物でも違って見えてくるんだなということを最近すごく感じるんですよ。

　福井に住んでいる人たちっていうのは、とにかく他県から来る人に優しいんですよね。それは僕の俳優仲間でも「福井にロケに行くと本当によくしてもらえるんだよね。押し付けがましい優しさじゃないんだ。」とみんな言うんですよね。ちょっと一歩引いているんだけども、本当に困ったときにスッと助けてくれたりとか、ちょっとした優しさを分けてくれたりとか、そういう人が多いよね、と皆さんおっしゃるんですよね。

　これからの時代は、際立った観光地よりも、住みやすい街と観光としてのクオリティの高さというものが融合して、シンクロしていく時代になっていくのではないかなと。住んで初めてわかるような微妙な空気の優しさとかそういうものを感じ取るような観光がこれから普及していくんじゃないかなと。観光のレベルがあがっていくんじゃないかなと思うんですよね。だからそういった次世代の観光地として、福井が新しいモデルになったらおもしろいなと思いますね。

【司会】

　ワクワクしますよね。では、社長さんはいかがですか。

【社長】

　津田さんがおっしゃるようにまさに「人」ですよね。僕もフェスをやるようになって、ミュージシャンの仲間たちを福井にお招きすることが増えるようになってもやっぱり、街の中でふと入ったお店の人がすごく優しかった、すごくおいしいものを食べさせてくれたとか、そういう街の中で誰と出会ったか、誰と話したか、そういうところがやっぱり街の一つの大きな印象になると思うんです。これは福井県というのは本当に大きなアドバンテージを持っていると思います。また、この福井でフェスを立ち上げるきっかけになった仲間たちも含めてとてもこだわりが強い人が多いわけです。長年にわたって、ずっとイベントをオーガナイズ（企画・計画）してきた人や世界的にみてもめちゃめちゃ評価が高い、でもアンダーグラウンドでマニアックなDJを招へいし、その興行を成功させているとか。もしくはここに在住なんだけれど、世界に向けて音楽を発信しているアーティストやDJがいるわけです。

　そういうこだわりをもった県民性というのも同時にあるので、外から来る方と、内に秘めた才能を外に出していくということが、これから福井がおもしろくなっていく一つのエネルギーになっていくんじゃないかと思います。

　もう一つ、よく言われるのが「遠い」と言われるんです。東京仲間には。

【津田】

　確かに。

【社長】

　たかだか３時間半なのに。乗り換えが一回あるだけでしょ？って。これがやっぱり遠いんですって。そういう意味では新幹線の開通は、皆さんが思っている以上に、行く方じゃなくて来る方、東京から来るって考えるとめちゃくちゃでかいチャンスなんですよ。このタイミングで福井に行きたいと思ってもらえるような街をこしらえておくこと、出来事をつくっておくというのが、今一番やらなきゃいけないことなんじゃないかなって、そう思っております。そんななかで、このONE PARK FESTIVALがそれに多少貢献できれば嬉しいですね。

【司会】

　知事、嬉しい言葉がたくさんありましたね。

【知事】

　そうですね。

【司会】

　県では可能性というのはどのようにお考えですか。

【知事】

　今おっしゃっていただいたとおりで、せっかく新幹線が来る、それから中部縦貫自動車道も岐阜県との間がつながって、東海との間もつながって、令和８年の春にはそれができあがる。こういうなかで100年に一度のチャンスが福井県に来ている。新幹線は人を運びますし、道路はモノを運んできたりとか、敦賀の港から人やモノが出ていく。こういう時期がもう間もなく来ているということで、まさにそれをチャンスに変えないといけないので、例えば観光で言えば東尋坊もそうですし、恐竜博物館も今やっていますし、一乗谷の朝倉氏遺跡の博物館もやったり、三方五湖の山頂公園を整えたり、そういうことで人が観光に訪れるようにする。それからONE PARK FESTIVALのイベントやアリーナみたいなものができてくれば、そういったイベントをそこの中に入れ込んでいく。さらには、人材というのは、学力体力日本一の福井県ですので、そういった方を今度はビジネスで、みんなで活用していただく。もしくは一緒に仕事をする、そういう場所にしていく。

　こういうことを、新幹線、中部縦貫自動車道、敦賀港の整備に合わせて、これから100年に一度のチャンスということで進めていきたいと思っています。

**（今後の抱負・目標）**

【司会】

　福井を盛り上げる起爆剤になるものがたくさんありますから、今後に期待したいですね。

　それでは最後になりましたが、今後の抱負、そして県民の皆さんにメッセージをお願いします。

　まずは津田さん、お願いします。

【津田】

　そうですね、今まで僕は18の時に福井を出て、東京でがむしゃらにやって、なんとか俳優として食えるようになったんですけれども、そうなってからすごく感じるようになったのは、故郷の優しさとか故郷の力強さとか、そういうものにどれだけ自分は助けられたんだろうと。いっときは福井を捨てて上京したんですけれども、ものすごく故郷にたくさん助けられたなというのは振り返るとやっぱり思うので、これからは自分が故郷のために何かできたらいいなと。自分発信で、社長さんみたいに故郷を活性化するイベントをやっていきたいなと思いますね。

　今知事もおっしゃいましたけれど、福井ってめちゃくちゃ右肩上がりだなと誰が見ても思うんですよね。駅前の空気が一昔前と全然違うんですよ。ぐわーっと沸き立ってて、若い人の歩いている姿が見えるっていうのは、福井を知っている人だったらわかると思うんですけど、昔なら考えられないんですよ。若い人が福井の駅前を歩いているっていうのは（笑）。おじいちゃん、おばあちゃんしか歩いていなかったんでね。今とんでもない奇跡が起きているので、この奇跡に乗っかって、もっともっと活性化できるように、自分もできることを考えていきたいですね。

【司会】

　津田さんの活躍にも期待しています。

【津田】

　ありがとうございます。

【司会】

　続いて、社長さん、よろしくお願いいたします。

【社長】

　そうですね。ご縁あって福井で音楽フェスを始めることができたので、これをぜひ続けることで、福井県といえば、と言ったときに、このONE PARK FESTIVALと言ってもらえるような、そんな音楽フェスにしていきたいと思っておりますし、それと同時に、福井ってなんか音楽おもしろいらしいね、とかあそこは良いアーティストいるよね、と言われるような、音楽が代名詞の一つになるようなそんな街になっていったら、今こうして音楽でご飯を食べている身からすると、すごく嬉しいですね。

【司会】

　力強いお言葉を聞けましたけれど、知事、お二人の言葉を聞いていかがでしたか。

【知事】

　本当に今日の回そのものがエンターテインメントだなという感じがしました。今年を語るというところはもちろんありますけれども、それが夢につながっていたり、今の福井がとてもいいんだという、すでによくなっていって、これがもっとよくなるっていうワクワクするような言葉をいただけたので、ぜひともこれを私たちさらに定着できるようにもっと盛り上げられるようにしていきたいですね。

【司会】

　そうですね。福井がもっとワクワクすることを楽しみにしています。

　それでは最後に知事、抱負をお願いします。

【知事】

　県の長期ビジョンのなかでは「安心のふくい」を未来につなぎ、もっと挑戦！もっとおもしろく！が基本理念になっています。安心のふくいを未来につなぎ、というのは福井らしさ、幸福度日本一とかウェルビーイング日本一、学力体力日本一、こういうみんなが誇れるような福井が基盤にあるわけです。その福井らしさをまず忘れてはいけないということを大事にしつつも、もっと挑戦！もっとおもしろく！みんながどんどんチャレンジをしながら、みんながチャレンジすることで地域も盛り上がり、自分も盛り上がる。こういう福井県社会にしていかなければいけないという風に思っています。

　そのためには、福井はやっぱり東京や大阪、名古屋のような大都会とちょっと違うので、行政は少し応援をしないといけない。ちょい足し応援と言っているんですけれど、そういうちょい足し応援をしながらみんなが楽しめる、もしくは自分が盛り上がれる場所をつくっていくということに今年はしっかり力を入れていきたい、そういうふうに思っております。

　見る側だけではなくて、自分が演じる側に行く。お二人を見ていても演じる側というのは楽しいんだなととても感じましたので、福井の方というのはちょっと引っ込み思案で受ける方が多いとよく言われますけれど、前に一歩出るというところをこれから大事に育てていきたいなと思います。

【司会】

　今日は今後が楽しみになる、ワクワクするお話をたくさん聞けました。

　津田さん、社長さん、そして杉本知事ありがとうございました。

【３人】

　ありがとうございました。